



## 災害対策室レポート

7月3日(金)から降り続いた雨は、九州の各地に洪水や土砂崩れをもたらし、その後北上して西日本の各地にも被害が出ました。この豪雨は、令和2年7月豪雨と名付けられました。救世軍では、以下のような支援活動に取り組みました。

### ■熊本での復旧活動に必要な物資の支援

7月4日(土)、災害対策室長吉田有太尉は、九州キリスト災害支援センター(九キ災)と被害状況を共有。また、JVOAD(認定NPO法人 全国災害ボランティア支援団体ネットワーク:救世軍は正会員)より、連絡を受けました。九キ災より、各教会等の被災状況が伝えられ、オンラインミーティング(インターネット上の会議)をキリスト全国災害ネット(全キ災:救世軍は正会員。キリスト教の教団、教派、支援団体が加入しているネットワーク)を経て、救世軍として、①コロナ禍のため、直接的な支援が困難な状況での被災地域に必要な支援、②九州地区の士官及び、戦友と現地の支援団体を支援、③現地のキリスト教団体(九キ災)の支援活動を物資面でサポート、を決定しました。

7月8日(水)に必要な物品リストを確認・調達し、キリスト教会広島災害対策室(同対策室長 広島福音自由教会主任牧師 北野献慈師、広島宣教協力会会長 日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド三滝グリーンチャペル主任牧師 堀川寛師)の協力を得て、直接現地に運ぶこととなりました。

7月12日(日)、前日に積み込んだ支援物資を、吉田大尉及び広島災害対策室の2人、計3人で届けました。

支援物資(数字は個数)は、スコップ50、デッキブラシ20、床用水切り20、竹ぼうき10、長柄ほうき10、てみ20、手すき板20、土嚢スタンド20、ヘルメット及び専用ライト30、軍手1,000、ゴム手袋1,000、マスク5,000、ちりとり20、ゴーグル100、かっぱ15、丸のこ5、ジグソー3(替刃100)、サンダー3(替刃200)、インパクト2(プラスビット50)、延長コード4、ドラムコード2、バール30、ハンマー10、ポリバケツ20、一輪車4、ブリキバケツ10、発電機2、ガソリン携行缶4、土嚢袋5,000、消火器3、消火バケツ3、ブルーシート10、雑巾10,000、ゴミ袋4,000、亀の子たわし50、スポンジたわし30、ハンドソープ50、麦茶600、スポーツドリンク600、クーラーボックス6、保冷枕100、蚊取り線香20缶、アルコール消毒液、熱中対策グッズ、タオル及び虫よけスプレー(適宜)。

九キ災益城ベースでは、中村陽志牧師(熊本ハーベストチャーチ)が対応してくださり、天候が安定しない厳しい状況の中、人吉市のキリスト教会を中心に復旧作業がなされていること、さらなるアセスメント後に地域支援を展開すること、コロナの影響で人手がない等の情報交換がなされました。今回は、全キ災が稼働し始めたタイミングとなったので、非常に有効な支援であったことが確認されました。また、今後、支援者のメンタルヘルスに関わる課題があることなどが共有されました。

現在も、オンラインミーティングを続けています。

### ■岐阜県の豪雨被災者支援

7月7日(火)～9日(木)にかけての豪雨により、岐阜県高山及び下呂地方で、浸水、土砂災害が起きました。名古屋小隊長齋藤丈夫大尉が、東海キリスト者災害ネット(名古屋小隊も加盟)から情報を得て、関キリスト教会(日本キリスト改革派)の橋谷英徳牧師と協働して、現地視察及び被災地への支援物資輸送をおこないました。

7月11日(土)、名古屋にて支援物資(土嚢袋、水、マスク、アルコール除菌液等)を調達、14日(火)朝、関キリスト教会にて橋谷牧師と合流、打合せ。飛騨川と白川の合流地点である白川町を視察し、すでに支援物資の必要は無かったため、下呂方面をめざしました。午後、下呂温泉で情報収集後、被災情報のある小坂町方面へ。土石流及び倒木で被災した民家で片付け作業をされている方にスコップやバケツ、土嚢袋を渡しました。また、小坂町長瀬に大規模な土砂災害を受けた住宅群があり、住民、ボランティアの方々に話を聞き、水、消毒剤、スコップ、デッキブラシ、雑巾等を渡しました。避難所(下呂市立小坂中学校)にも水、アルコール除菌液、マスク等を渡しました。道沿いに散見された被災家屋にも必要な物品を届けながら、準備した支援物資をほぼ渡し終わり、関キリスト教会へ戻りました。

今後の支援の可能性について検討し、続く雨とコロナの感染状況に注意しながら、今後も支援物資を届けつつ状況を確認する必要があること、他の教会関係者の協力も模索することを話し合い、名古屋へ戻りました。



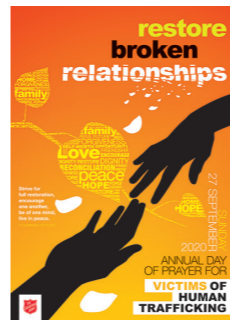
写真上より  
・キリスト教会広島災害対策室 対策室長 北野献慈師(左端)等によって積み込まれた支援品  
・九州キリスト災害支援センター 益城ベースにて、中村牧師(左)に物資を手渡す吉田大尉

### ■緊急支援のための車両が納車される。

緊急災害等の支援に用いる車両が、東北地区(関東東北連隊と仙台小隊)に2台納車されました。

今後も災害対策室は、東日本大震災の被災地である東北において支援活動を続けていきます。引き続き、復興途上にある被災地を覚えてお祈りください。

なお、SAWSO(救世軍ワールド・サービス・オフィス)による東日本大震災による被災地支援は、2011年12月からおこなわれておりましたが、2020年9月末をもって終了いたします。すべての活動報告及び資金報告は、米国での決算後10月以降にご報告いたします。



## 人身取引被害者のための祈祷日

9月27日(日)

破壊された関係の回復を求めて

参考資料

「現代奴隷制・人身取引と救世軍」(『自由のための戦い』万国社会正義委員会発行より)

### ■アンナのものがたり

バス停でバスを待っている時、グレイスに初めて話しかけられました。すぐに打ち解けて話せたので、友達になり、お互いの家を行き来してはおしゃべりするようになりました。ある日、グレイスから、彼女のいところが私にお給料の良い仕事を紹介してくれると言われました。その仕事をすれば、家族にお金を送ってあげられるだろう、とも。今まで行ったことのない、知合いの誰もいない外国での仕事なので、私は少し不安になりましたが、ちょっとワクワクしました。

パスポートもお金も、移動のチケットがなくても、そのいところがすべて用意してくれるから心配ない、とグレイスは言いました。私はそのいところを信じ、すべて任せてしまいました。そして、出発のバスに乗るために、さよならを言う時まで、私はすべてうまくいくと思っていました。でも、それは私の間違いでした。

バスが目的地に着くと、1人の女性が迎えに来ていて、私を一軒の家に連れて行きました。そこには3人の女の子がいて、すぐに、私が何をしなくてはならないか話してくれました。私は怖くなって泣いて、泣いて、泣きましたが、そこにいた男性とさっきの女性は、もう私は彼らのものだ、と言って私を殴りつけると、家族もひどい目に遭わせることができるんだぞ、と言いました。

これが、私の悪夢の始まりでした。私は毎日下着だけ身に着けた状態で、その家に来る男性の相手をさせられました。日の出から夜中まで働かされ、客として来ていた男性に助けてほしいと頼んでも、誰も助けてはくれませんでした。私は、死にたいと思いました。

私はずっと、鍵を掛けられた家に閉じ込められていましたが、だんだん信用されるようになり、時々通りにあ

## 医療部

医療部からの使い捨てマスクの募集に、全国の小隊、戦友、事業所より、約1,000枚の使い捨てマスク(6月16日現在)が、寄せられました。ご協力に深く感謝いたします。本営からのマスクの提供、国からの医療用マスクの支給もあり、医療部各事業所とも在庫がある程度安定してきました。感謝しつつ募集は終了いたしました。

万国本営発行のニュースにおいて、日本の医療部が、医療の最前線の働きとして、写真と共に掲載されました。【ブース記念病院】

患者関係者から寄贈された布マスクは、地域への宅配

る小さな店で買い物をさせてもらえるようになりました。ある日、私は、今日がチャンスだ、と思い、お店の人に、警察を呼んでほしいと頼みました。そのお店の人も、ずっと私の様子がおかしいと思っていたようで、とても親切にしてくれました。そして、駆けつけた警察もそうでした。

警察はいくつかの質問をすると、私を保護し、救世軍の施設に連れて行ってくれました。そこには、私のような女の子が数人いました。最初誰を信じていいのかかわからず、辛い時を過ごしましたが、少しずつ私に起こったことの話聞いてもらううちに、安心できるようになりました。そして、私はだんだん自分の人生を取り戻せたような気持ちになっていきました。

### ■救世軍と人身取引

救世軍では、その活動の初期から、人間が売られるという忌まわしい事業に反対するという戦いに尽力してきました。しかし、大陸間の奴隷制度が廃止になった後にも、救世軍は女性や女兒が性産業のために売られていることを認識してきました。この戦いは、救世軍が勝利を勝ち取るべき戦いであり、世界中において、救世軍はこのための多くの働きをしています。

特に、2004年5月に開催された、救世軍万国指導者会議において、“性的搾取のための人身取引という悪と戦うため”の取り組みが宣言されました。そして、それが救世軍の万国的な年次報告における救世軍の5つの優先事項の1つに掲げられました。

世界中の救世軍人は、この大きな呼びかけに応じて、人身取引に関する認識を深めるにつれて、心はかき乱されました。そして、新しいあらゆるレベルの働きにおける取り組みが始められました。軍国・連隊・小隊や施設で、それぞれの文化において人身取引の姿はどのような姿であるか、という認識が深められていきました。

時には、個々の救世軍人が、ニーズや利用可能な資源に応じて、この呼びかけを武器として用い、戦ってきました。現在、救世軍は、世界中のあらゆる形態の現代奴隷制と人身取引に対応するための国際的な戦略と、改訂された万国見解声明をもっています(日本語未訳)。この戦略は、現代奴隷制と人身取引への強力で持続可能な対応が、救世軍の組織構造に組み込まれることを可能にしていくものです。

弁当につけて配布しました。感染防止の緊張状態の中、礼拝をチャプレンによるテレビ中継で守っています。

【清瀬病院】

近隣で患者や医療従事者に新型コロナ感染者が出ていますが、少しずつ制限緩和の準備を進めています。

【グレイス】

通所リハビリ(デイサービス)は人数を制限しながら継続しています。

【恵みの家】

6月より礼拝を再開。人数や車いすの配置など感染防止対策を取りながらの実施です。中止していたショートステイも再開いたしました。

## 〈連載・第6回〉 神の呼びかけ ～神の民となるために～

### (2) 礼拝への呼びかけ

(承前) お互いの内におられるキリストに気づく時、集まりの中でキリストの臨在を意識する時、また、キリストの模範に従おうとする時に、わたしたちは自然と、さらにキリストの似姿へと変えられていくことでしょう。そして人々が、わたしたちの内にキリストの姿を見いだそうとする時に、イエス様は確かにそこにおられることでしょう。集まることには意味があることがわかり、そこで大切な出会いを経験できたことが、大きなインパクトとして残ることでしょう。

### 質 問

1. 集まりの中で、キリストと個人的な大切な出会いを経験するためには、どうしたらいいのでしょうか。
2. わたしたちの礼拝において、どのようにキリストに近づき、どのようにキリストの臨在に気づくことができるのでしょうか。
3. わたしたちの集まりの中で献げている礼拝は、わたしたちの日常生活の送り方とどのように関わりがあるのでしょうか。
4. わたしたちの礼拝は、新来者にとってどれほど関連性があるのでしょうか。彼らはどれほど理解することができるのでしょうか。わたしたちはどのようにサポートできるのでしょうか。

### 参考になる聖書箇所

申命記5・7、イザヤ1・11～18、詩編95・6及び96・9 ヨハネ4・21～24

### (3) 神の言葉への呼びかけ

わたしたちは、世界中の救世軍人に呼びかけます。新たな、時代に即した形で神の言葉を宣言し、これによく注意を払うこと、そして救世軍人である個人としても、ムーブメントとしての全体としても、御言葉の革新的な要求に、迅速かつ確固とした姿勢で従うことを。

福音が説かれる際、神が語られることをわたしたちは認めます。聖書は、神の書かれた言葉です。説教とは、その言葉が開かれ、読まれ、宣言され、説明されるということです。わたしたち人間の弱さと愚かさの中でも、御言葉を忠実に示し、解き明かすなら、この世界は、新しいことを見聞きするかもしれません。神が語り、神が働かれるからです。従順な信仰で応答することは、神との決定的な出会いをもたらします。神はシンプルな言葉、一般的な言語、力強いたとえを通して、深遠な真理を語られることをわたしたちは認めます。そして、あまりにも多くの場合、わたしたちの言葉が表面的で、あいまいであり、時代遅れで、的外れであり、わたしたちの神を

表すよりも、かえって覆い隠してしまっていることを告白します。

救世軍の教理第1条が、神の言葉に重点を置いていることは、偶然ではありません。「われらは、旧新約聖書が神の感動によりて与えられたること、また聖書のみが、クリスチャンの信仰及び実行に関する、神の法規たることを信ず。」

聖書がなければ、わたしたちは迷ってしまうでしょう。聖書は方向を示し、訂正し、試し、命じ、希望を与え、解き明かし、生活の基盤を与えてくれます。聖書は、神がこの世界に与えておられる真理です。その言葉は、命をもたらします。赦しと救い、新しくされ、生きるための力を得ることは可能だという、神が、御自分の民の人生に意図しておられることが書かれているのです。このメッセージが廢れることはありません。さらに発見すること、さらに受け取ること、さらに生きる糧となるものが、常に与えられるのです。聖書を探求することは、終わることのない冒険に乗り出すことです。思いと心が試される、その旅を通して神の臨在が約束されています。

『マーチング・オン!』の中で、テッド・パーマーはこのように書いています。

「救世軍が年月を通じて、権威と成果を携えて神に仕えることができたのは、神の御言葉に動機づけられてきたからだ。御言葉の原則に従って組織を編成し、常に聖書の戒めに従って、すべきこと、すべきでないことを評価した結果だ。」

これは励ましを受ける言葉ですが、その反対も真理であると言えます。神の言葉を軽んじるならば、権威と成果が失われるということです。救世軍のあり方、またその活動すべての中心に聖書が置かれているのでなければ、救世軍は疑いなく、その使命の達成に失敗してしまうことでしょう。他の言葉は、それがどれほど魅力的で、巧みに語られたとしても、神の言葉と一致しないのであれば、何の役にも立ちません。

万国霊的生活委員会が、新たな、時代に即した形で神の言葉を宣言することを勧める理由はここにあります。神の言葉に、よく注意を払うことを勧めるのはこのためなのです。個人においても、全体においても、御言葉が求めることに対して、迅速かつ確固とした姿勢で従うことが必要です。万国霊的生活委員会は、すべての小隊において、次の質問に答えるため、十分に時間をかけて熟考されるべきだと考えます。

「どうすれば、わたしたちは小隊として、すべての営みの中心に神の言葉を置いていることを確信することができるだろうか。」

このことが優先順位となっていること、これを達成するよう共に模索すること、それはすなわち、小隊の心臓が健全に鼓動していることを確実にすることです。

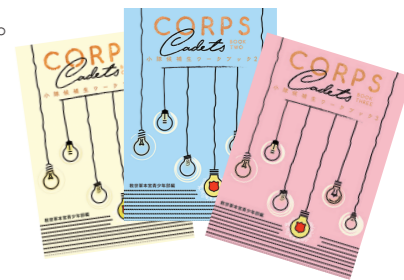
(続く)



『小隊候補生ワークブック』が、この春全3冊完成しました。聖書の学びはもちろん、信仰生活にとって大切なこと、救世軍についても学べる教材です。

小隊候補生になりたい方、また、この教材を学んでみたい方は、ぜひ小隊長にご相談ください。いつでも学びを始めることができます。

9月22日は、日本における救世軍の開戦記念日なので、関連する内容を取り上げた、教材の一部を掲載いたします。



### 1895年、日本に救世軍がやって来ました!

1895(明治28)年は、日本が清国(中国)との戦争(日清戦争)に勝利したことで、近代国家として認められ始めた頃でした。数年前から日本に救世軍の士官を派遣しようと考えていた救世軍の創立者ウイリアム・ブース大將は、33歳の司令官エドワード・ライト大佐のもと、十数人の既婚及び独身の男女の士官を日本に任命しました。

9月4日、横浜港に着いた船から降りてきた救世軍の一行が身に着けていたのは浴衣だったので、港に居合わせた人々は大笑い。日本で働くから日本式の衣服を身に着けたい、と途中寄港した香港で日本人の仕立屋に和服を注文したところ、おそらく寝間着が必要なだろう、と浴衣が渡されていたのです。

日本における最初の救世軍本営は、東京の京橋新富町の新富座前に置かれました。新富座は、有名な大劇場だったので、多くの人で賑わう繁華街の中心に拠点を置いたところに、一人でも多くの日本人の救いを願う熱意がうかがわれます。

9月22日夕刻、東京・神田美土代町に前年に開館した基督教青年会館で、救世軍の開戦式が行われました。ライト大佐は紋付の羽織を着用、和服に身を包んだ士官に交じって、インドの服装をした士官や、大学出身であることを表す学帽学服の女性士官もいたことが記録されています。ライト大佐は、救世軍の起源などの説明の後、「日本人の家に住み、日本人の衣服を着て、日本人の食事を食べ、日本人同様になってこの国に主の救いを宣べ……特に貧しい人のために力を尽くしたい」と宣言しました。

10月には、最初の軍営(小隊)が、開設され、毎夕7時半より集会が開かれ、日曜日には午前10時、午後2時半、7時、と3回集会が開かれました。また、同じ場所に士官養成所が設けられました。

### 日本の救世軍が始まった頃の活動

#### 1895年

神様は、来日したばかりの救世軍に山室軍平という青年を送りました。山室は、友人の石井十次の紹介で救世軍本営を訪ねたときに渡された、ブース大將著『軍令及び軍律 兵士の巻』を読んでその日常生活に表れていく信仰と考え方に共感しました。一カ月半ほど救世軍の夜の集会に通った山室は、士官養成所で学ぶ士官候補生となり、翌年1月には士官に任命されたのでした。

#### 1900年

日本での働きが始まって5年の間に、熱心な伝道がなされ、都内には5カ所の小隊、全国には10以上の小隊が開設されました。社会福祉の働きとして、刑を終えた人々への支援や、横浜港に上陸する外国船の水夫が利用できる水夫館(宿泊・食堂・読書室・風呂を提供した。数年後に閉鎖)、そして、性的人身取引の被害者であった女性を保護する「婦人救済所」を設置しました。救世軍は、売春を強いられた状態の女性が自分で希望するなら辞められる法律があることを公報『ときのごえ』に掲載して配布し、多くの女性を助けました。それに反対する人々から救世軍の人々が暴行を受けたことが新聞に掲載されたことから、救世軍の女性を助ける働きが注目されるようになりました。

#### 1926年

救世軍の活動は、伝道と社会福祉の両方で目覚しく発展しました。1907年には、ウイリアム・ブース大將來日。北は仙台から南は岡山まで巡回し、講演・伝道集会を開くとともに、天皇陛下との謁見や、政治・官職・経済・教育等、各分野の要人と会談することによって、救世軍の支援者を得ることができました。その2年後には救世軍病院の開設、青少年の働きの充実、米国日本人部の設置、1919年には、神田一ツ橋通り(現・神保町)に救世軍本営ビルを建築するまでに発展していきました。1923(大正12)年の関東大震災で、この本営ビルが倒壊し、士官の死者も出ましたが、救世軍はすぐに大規模な救援活動を展開しました。

1926(大正15)年、第2代救世軍大將ブラムエル・ブース大將が来日。その際に、山室軍平が日本人初の司令官に任命されました。